

# 壮春力歩

会長 鈴木 末一

## ならやまの知的財産の伝承

ならやま里山林が所在するエリアは、地域の町づくり協議会などにおいても、「古代と未来をつなぐ町づくり」をキャッチフレーズに取り組みを進めているが、市街地に隣接する歴史的風土と恵まれた自然環境を最大限に活用し、多様な里山機能の活用と推進に心がけていかなければなりません。

今月3月、環境省並びに国連「生物多様性の10年」日本委員会（UNDB-J）から第12弾連携事業として認定を受けました。認定のポイントは、自然観察、里山整備、文化行事、環境教育などの多彩な活動を通じて、生物多様性の保全と持続可能な利用について取り組む活動であること、また、対象を、青少年だけでなく保護者や一般市民へと拡大し、相互に共有体験できるステージを提供し、環境問題への意識高揚と豊かな発想力の涵養、そして、「里山再生保全」から「里山機能創生活動」へとスキルアップを図っていることが評価されました。

2007年4月から取り組みを始めた「ならやま里山林景観形成整備保全ボランティア活動」（通称・ならやまプロジェクト）において、草創期から今日まで、会員の皆様方の献身的なご努力により、日本の原風景である里山林が蘇りつつあります。景観整備保全活動に伴い、生物の同定が進められて年々増加傾向にありました。しかし、近年の水生生物や希少植物調査では、種の数や個体数ともに徐々に減少傾向にあるのではと危惧されます。

会として本格的な活動の拠点を探し求めていた2006年、会員のKさんが奈良県において里山林の景観整備ボランティア活動募集の情報をキャッチされ、幹事に提案されたのが、「ならやまプロジェクト」に取り組むスタートラインでした。荒涼殺伐とした里山林の実態把握のために、「森の健康診断」と銘打ってKさんをリーダーに約2年間を費やして実施され、その調査結果を、黒田先生（当時：森林総研関西支所、現在：神戸大学教授）に提出し、里山林の整備についてのご教示をお願いさ

れました。

調査結果を閲覧された先生から「年を取った森で新しい木が育っていない。古木と、混み合った常緑樹を伐採し、森に光を入れ、若返らせることが肝要ですね」とのご意見をいただきました。そして、2010年2月に里山講習会を開催し、「ナラ枯れ問題と里山林の管理」と題して黒田先生にご講演をしていただきました。

「ならやまの自然誌」は、2011年にM物産助成団体報告会に向けて、Fさんをリーダーとして作成されました。分野ごとに担当した会員の皆さんの調査結果を集大成したものです。当時同定された生物についてのものであり、その後の観察調査活動の積み重ねにより、新たに確認できたものも多数あります。

「ならやまの四季」は、Mさんがリーダーとして作成されました。ならやまの四季折々に観察できる花暦（樹木、草花）、昆虫、野鳥などを主にまとめられたものです。

いずれも少人数で、しかも日常の景観整備活動の合間を縫うような形で取り組まれました。貴重な資料であり、ボランティア活動では類まれな資産でもあります。詳細については、ホームページの資料室などをご覧いただきたい。

いつも申し上げますように、活動は第二ステージへと歩み続けています。新しい仲間も増えてきました。会員169の個性とニーズがありますが、「ならやまプロジェクト」の未来像（コンセプト）について、同意形成、情報の共有を図らなければなりません。早ければ来月にも、新入会員さんはもとより、会員の皆様方とのコミュニケーションの場を設けたいと考えています。

会の理念①自然との共生、②地域社会への貢献、③生き生き活動、そして、「すべては次世代の子供たちのために」——市街地里山の自然の在り方から命の大切さを学び、生き方を考える。この方向性は寸分たりとも違えることなく、「ならやまユートピア」具現化に向けて額に汗する日々を実現しようではありませんか・・・。

会の活動の歴史をより正確に伝えるため、今後とも貴重な情報をぜひお聞かせください。